ポーランドに暮らしてみると

-ある日本人学生の視点から-

How Do I Live in Poland?:

From a Japanese Student's Point of View

東京外国語大学大学院博士後期課程　**貞包　和寛**

SADAKANE Kazuhiro

(Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies)

キーワード：ポーランド、外国政府等奨学金留学生、海外留学

目指すはカトヴィツェ、学生寮

思えば遠くに来たものだ。成田から飛ぶこと凡そ10時間、ヘルシンキで乗り換えてまた1時間、降り立ったのはポーランド共和国の首都ワルシャワ、フレデリック・ショパン空港である。ショパンはおそらく飛行機に乗ったことは無いはずだが、この際どうでもよろしい。ワルシャワ中央駅からさらに電車に揺られること5時間、列車はポーランド南部シロンスク県の県庁所在地、カトヴィツェに停車する。そこから市営バスのターミナルに入り、12番線に乗って20分、私の目的地であるシロンスク大学学生寮はそこにあった。ザドレ公園に連なる広大な敷地、鬱蒼と茂る木々の中に立つのは4棟の建物である。学生寮1号館、2号館、3号館、そして7号館。4から6はどこに行ったのか分からない。寮の守衛にその件を尋ねると、「番号ふり間違えたんだよ」と一言。そんな馬鹿な話があるものか。こうして私の留学生活がはじまった。

私が現在住んでいるのは1号館、通称「ムカデ」寮である。5階建て、南北に長く伸びるその建物は、黒ずんだ外壁も相まって、確かに足のないムカデに見えなくもない。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

写真 1：シロンスク大学学生寮 1 号館（筆者撮影）

寮に住む学生たちは自嘲気味に自らを「森の住人」と呼ぶ。無論、ジブリ映画のような夢とロマンに溢れた森ではない。カトヴィツェの街外れ、最寄りのスーパーまで徒歩 20 分。夜中になれば野生のイノシシが人の捨てたゴミを漁り回っている森である。自嘲したくもなろう。そして今宵もウオッカのボトルが次から次に空いていくのである。

留学生になるまで

拙稿の読者の中には、これから短期、長期を問わず留学を考えておられる方も少なくないだろう。以下、そのような方々に多少なりとも益することを望みつつ、私の留学までの経緯を説明したい。

私は現在、東京外国語大学大学院博士後期課程に在籍し、ポーランド政府奨学金[1]留学生（以下、「本奨学金」と略す）の制度を利用してこの国に滞在している。類似のプログラムは他国も実施しているようで、その一部は日本学生支援機構のウェブサイトで一覧できる[2]。以下は私の経験に即し、ポーランド政府の実施する奨学生募集を例に説明するが、必要書類や応募資格は国ごとに異なっていることがある。その点、予めご留意頂きたい。

本奨学金の日本における窓口は、東京のポーランド共和国大使館が務めている。応募書類は、欧文（英語もしくはポーランド語）と和文の二揃いを用意し、欧文のものはポーランド大使館へ、和文のものは和文書類提出先の日本学生支援機構に郵送する。

奨学金申し込みに際して様々な書類が必要となることは言うまでもないが、中でも推薦状は応募者にとって一つの関門となり得る。本奨学金の場合、推薦状は 2 枚求められる。かつ、推薦状の原本が日本語である場合、ポーランド語か英語に翻訳したものを大使館に提出しなくてはならない。逆に、原本が英語やポーランド語である場合、日本語に翻訳したものを日本学生支援機構に提出する必要がある。例えば、日本語の推薦状を指導教官などから得られたとしても、それをさらに翻訳するという手続きが必要となる。他の書類（履歴書、研究計画など）に関しては応募者本人の翻訳が許可されているが、推薦状に限っては第三者による翻訳が絶対である。私の場合、この点が非常に恵まれていた。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

東京外国語大学ポーランド語専攻時代に師事した先生方や学友の助力を得て、推薦状に関しては円滑に事を運ぶことが出来たからである。もしこのような繋がりを持たない場合は、予め信頼できる翻訳会社を決めておくことを強くお勧めする。

推薦状の次に重要な書類は、研究計画である。後に詳述するが、面接においては提出した研究計画を基に質疑応答が行われる。よって、しっかりとした計画を書くことが自然と面接の対策ともなる。枚数等の分量は特に指定はないが、そう長いものである必要はない。私の場合は A4 で 2 枚ほどだったと記憶している。

書類提出を終えた後はいよいよ面接である。大使館や日本学生支援機構から別途連絡が無い限り、予め指定された日時に大使館へ向かうこととなる。提出した研究計画などを面接の一週間ほど前から入念に読み返し、自分がなぜ留学に行きたいか、ポーランドでどのような研究をしたいかを再整理する。さらに面接の前日、当時東京都府中市に住んでいた私は、東京五社のひとつである大國魂神社に赴き、学業成就のお守りを購入した。つまり、やるべきことは普通の試験や面接前と変わらないのである。未来の応募者もまた、それまで自分が積み上げてきたものを信じ、平常心で望めば、何も案ずることは無いと確信している。

面接は日本語で行われる。試験官は 2 名、大使館職員（ポーランド人）と、日本の文部科学省の担当者である。私の場合は、修士課程まで専らポーランドに関係する研究をしてきたこともあっただろうが、志望動機に関してはそれほど深く質問されることはなかった。無論、これまでポーランドに関わったことの無い方が本奨学金に応募されるのであれば、なぜ本奨学金を志望したかについて深く尋ねられる可能性はあるだろう。しかしこれに関しても、やりたいことを明確にし、意欲をもって伝えれば問題は無いものと考える。と言うのも、それまでポーランドとは殆ど無縁の生活をしてきた後に本奨学金に採用された方もおられるからである。

以下は私の個人的な話になる。採用後に問題が起こった。シロンスク大学からの受入通知が届かないのである。大使館担当者から採用のメールを頂いたのは 7 月の終わり、そのうち大学から郵便かメールが送られてくるのだろうと私はのんびり構えていた。しかしひと月過ぎてもナシのつぶて、大使館の担当者も「大学にお問い合わせ下さい」と繰り返すばかり。8 月も終わりが見え始めてくると、流石に焦りだした。出発予定は 10 月 1 日、しかし受入通知が届かない今の状況では、留学ビザも申請できないではないか。ついに堪りかねて、以前にポーランド語夏期講習でお世話になったシロンスク大学の教授に泣きついた。すると 3 日後、学長補佐のサインが入った受入通知がメール添付で届き、すぐ後に原本が郵送されてきたのである。これには開いた口がしばし塞がらない思いであった。つまり、待ち続けた 1 カ月は全くの無為だったという訳だ。料亭なら女将が土下座するくらいの話である。

この 1 件から我々は何を学ぶべきか。それは、個人的な繋がりを積極的に持ち、かつ極力それを活かすべきである、ということだ。こと留学に関して言えば、受け入れ先の誰かに知己を得ていれば、

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

私の場合そうであったように、何かと便宜を図ってもらえる。無論、初めから好意に甘えるような心持ちは頂けないが、いざという時に頼れる人と連絡を持っておくことの重要性は変わらない。これから留学を考えておられる方も、奨学金なりプログラムなりに応募する前に、自分が指導を仰ぎたい人物にメールや手紙で予め意思表示をしておく事を勧めたい。その際に、自分の研究計画などを提示することが出来ればなお良いだろう。場合によっては、その先生に推薦状執筆を願い出ることもできる。

まとめると、以下のようになる。

（１）自身の研究計画等を準備し、常に見せられる状態にしておく。

（２）留学を希望する大学や研究機関の関係者とコンタクトを取れるよう模索する。

（３）必要書類の中でも、推薦状は取り分け早めの準備が肝要である。

（４）採用が決まっても安心しない。

住めば都

冒頭の記述から、現在の私の居住地に最果ての地のごとき印象を受けられた方も少なくはないだろう。ここで正直に告白するが、些か大袈裟に書いている点はある。病気自慢、怪我自慢ではないけれども、我が身の不幸を実際より大きく託ちたくなるのは人の業というものである。どうかご容赦頂きたい。確かに少々便の悪い部分はあるものの、概ね私は現在の生活が気に入っている。そのような訳で、以下は私の現状について、大学以外のことも含めて簡単に記していこうと思う。

現在私は、学会やセミナーなどに参加する際、シロンスク大学博士課程という肩書を用いている。実際は政府給費留学生としての滞在なので、正規の大学院生と言うより「客分」の扱いになるのだが、日本で修士論文を書き終えていたので、博士課程在籍者（ポーランド語で doktorant）を名乗っても問題無いとのことであった。大学の授業に関して言えば、大学事務局からカリキュラムなどの細かい指示はされていない。基本的には、履修したい授業の担当講師に個人的に連絡を取って参加させてもらうという形である。博士論文を書こうという者は自分で考えて動きなさいということなのであろうが、カリキュラムに縛られず研究に専念できるのは非常に有り難い。ご縁の有る先生方とは、論文やプレゼンテーションを作成する際に、ポーランド語の添削を含め意見を交換している。必要な時だけお知恵を拝借しているようで冥利が悪いのだが、全ては学問のためである。

留学当初は、ポーランドに居住するウクライナ系の少数民族「レムコ人」の言語に興味があった。現に、私の修士論文のテーマはそのレムコ人の話す「レムコ語」をテーマとしたものであった。しかし留学生活が3カ月、半年と過ぎていく内に、次第にポーランドのマイノリティ言語や、それらを扱う言語政策一般に興味が移り始めた。この心境の変化の理由は自分でもよく分からないが、カトヴィツェという街に滞在して、シロンスク地方の方言に触れたことが大きいのではないかと思われる。

シロンスク地方は、あるいはシュレージェンやシレジアという呼称のほうが我が国で馴染み深いか

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

も知れないが、その特異な歴史と共に、独特の方言でもって知られる地域である。この地方の言葉はシロンスク方言と呼ばれ、ポーランドの言語学界では伝統的に「ポーランド語方言のひとつ」と見なされてきた。しかしながら 2011 年の調査で、自らの民族籍（アイデンティティ）として「ポーランド」ではなく「シロンスク」を選択した者の数がおよそ 362,000 人に上ることが判明した。ポーランドの総人口が約 38,000,000 人であることを考慮すると、これは決して小さい数とは言えない。無論、現代は地域や国境を超えて多くの人が往来する時代であるから、「シロンスク人」とは如何に定義されるかという問題も出てくる。しかし、この地方の住人の一部に、自らの話し言葉を「シロンスク語」と認めることを要求する人々が少なからずいることは事実である。他のポーランド語方言地域では、言葉に関するこのような議論は殆ど見られないので、この問題はシロンスク地域の一つの特徴と言っても良い。実際に街を歩くと、標準ポーランド語とは語彙や発音の点でやや異なる言葉が用いられているのが耳に入ってきて興味深い。そのような訳でこの頃は、ポーランドに限らず EU やアメリカのものも含め、言語政策全般に関する資料を集め、その中で特にポーランド的と呼べる特徴は何かということを考えている。

次に、研究以外の生活について書いてみたい。長期滞在して最も良かったと思えることの一つに、在り来りではあるが、現地の年中行事や人の機微に触れられるということがある。短期の旅行や滞在だけでは、その辺りの呼吸を深く知ることがなかなか難しいものだ。また、学友のご家族の中には、折にふれて私を自宅へ招待して下さる方があり、全く感謝の念に堪えない。拙稿では、4 月の復活祭に私が訪れたジヴィエツという町の思い出を、写真と共に振り返ってみたい。

ジヴィエツはポーランド南部、スロヴァキアとの国境約 20 km の場所にある。行政区分としてはカトヴィツェと同じくシロンスク県に属するが、文化的区分としては寧ろ、クラクフを中心とする「小ポーランド」と呼ばれる地域に属す。下の写真は町の中心部、市場の光景である。

写真 2：ジヴィエツの広場の様子（日本語版ウィキペディアより）

三国分割によるオーストリア支配下の 1856 年、ハプスブルク家のアルブレヒト大公によってこの町にビール醸造所が建設された。そこで生産されたビールは今日、ポーランド全国に流通している。ジヴィエツ醸造所を中心とする五つのビール工場は「ジヴィエツグループ」を形成し、ポーランドにお

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

けるビールシェアの 35% を占める。恐らく、ポーランド人でジヴィエツという町を知らないものはいないだろう。なぜならそのビールの名は、町名を取ってそのものずばり「ジヴィエツ」と言うからである。このビールのロゴマークは民俗衣装を着て踊る男女の姿をあしらったもので、非常に美しい。残念ながら拙稿では個別商品に関わる画像は添付できないが、興味を持たれた方は「ジヴィエツ ビール」と検索して頂きたい。カタカナで検索すれば日本語のブログ記事等が見つかるはずだ。

さて、私にはかの地を出身とする神学部の友人がいる。その友人が今年の復活祭（イースター）の休暇に実家に誘ってくれたのが、この町を訪れた初めであった。友人宅はジヴィエツ駅から車で 20 分ほど、町の郊外にある。ご家族は両親、友人、姉が一人に弟が二人。これだけでもかなりの人数だが、さらに里子としてご両親が育てている子供が 7 人。これに 2 匹の猫と 3 頭の犬が加わった大所帯である。さらに、日本の盆正月でもそうであるように、休暇中は親戚や知合いが家を頻繁に訪ねてくるものだから、家の中は人の声が常に絶えることがない。ともかく賑やかな滞在であった。

写真 3：復活祭の食卓（筆者友人より提供）

写真は復活祭に際して饗された晩餐である。周知の通り、復活祭とは十字架に架けられたイエスの復活を祝うキリスト教の習慣であり、国や地域によって細部は異なるものの、卵が「復活」のモチーフとされている。日本においても装飾品としてのイースター・エッグはよく知られており、最近では蝋で絵付けしたウクライナのイースター・エッグ「ピーサンキ」が人気を博していると聞いている。ポーランドにおいても卵に絵付けする習慣があり、食卓では多彩な卵料理を家族で囲む。写真 3 でも、卵を使った料理を三つ見つけることができる。

まとめ

私はいま、好きなことを好きなようにさせてもらっている。人生 80 年という時代になってきているが、このような時を過ごせる期間というのは貴重なものであろう。人によっては健康上、経済上、あ

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

るいは他の要因から、そのような時間を殆ど持てないということもあり得るからである。その点に考えを及ぼす時、自分の現状はひとえに周囲の理解と助力に恵まれた故の結果であることを痛感する。無論、外国ぐらしは何かと勝手が違い、随意に任せぬこともある。しかしそれらを差し引いても、非常に贅沢な、将来において実りある豊かな時間であることに変わりはないのである。拙稿を読んでおられる皆さんの留学もまたそうなって欲しいと願いつつ、筆を擱くこととしたい。

[1] （編集部より注）外国政府奨学金の募集や必要書類は年によって変更があるため、応募を検討している方は必ずその年の最新の募集要項を確認することが必要です。
[2] 詳しくは日本学生支援機構「外国政府等奨学金留学生」のページ
(http://www.jasso.go.jp/study_a/scholarships_foreign.html) を参照していただきたい。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.